

①「歴史を紀行する」 司馬 遼太郎/著 文藝春秋

著者の並々ならぬ情熱の旅に基づいて、12 地域の歴史文化や人物像がディープに描かれた稀書。鹿児島、高知、会津、滋賀、大阪、萩ほか全 12 編。私自身は「日本特有の美的表象の源泉」に興味があり、日本の南西地域の調査を開始して 10 年目です。教科書では学べない日本に触れる本です。

②「外国人による日本論の名著 ゴンチャロフからパンゲまで」 佐伯 彰一/編 中央公論社

20 歳の時はじめて海外（欧州）を旅しました。この異文化体験によって改めて「日本とは何か？」と自問しましたが、簡単にはわからずでした。本著は多国籍の外国人（中国、インド、ロシア、ギリシャ、独、仏、西、ポルトガル、英国、エジプト、米国）による日本論。中でも 1916 年に来日した（ノーベル賞受賞後）タゴールの言「（外国の）模倣はできても生命は真似できない」という表現が印象的です。

③「近世女人の旅日記集」前田 淑/編 葦書房

さて、次にご紹介するのは外国人ではなく日本人の視点。江戸時代の日本が 14 編の日記集に記されています。そこに近江の歌人 菅沼逸による「岸和田紀行」を見つけました。約 300 年前、1713 年 3 月の岸和田が記されています。コロナ禍で距離のある旅を楽しめないこの頃、タイムトラベルはいかがでしょう。

④「渦潮の譜 岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」

梅谷 卓司/著 朱鷺書房

江戸時代、お付きの学者を持つ藩主はどのくらいいたでしょうか。1851 年に岸和田藩校講習館の教官となった学者 相馬九方（讃岐高松出身）が、元岸和田藩主から「人を知らざるを憂う」と書かれた書を下されています。吉田松陰が相馬に会うために岸和田を訪れるなど、京都で学問を洗練させた相馬の存在は地域を越えて轟いていたことがうかがえます。学術文化の基礎に影響を及ぼしたであろう相馬の、岸和田での軌跡を知る一冊です。

⑤「逆転発想の人事評価

～元気な自治体をつくる～岸和田方式・「人材育成型」制度のつくり方と運用法』

小堀 喜康/著 ぎょうせい

さて、江戸時代の岸和田から現代の岸和田へ。地方創生が叫ばれて久しいですが、日本の行政構造で可能なのでしょうか。各地域が自治体力を発揮して、真に骨太になるためには、公務員の適材適所、適格性を洞察する人事が必要と感じます。私はこの本を鹿児島県立図書館で見つけました。公務員＝最も安定した憧れの職である地域は日本各地にあり、岸和田発のこの人的資源管理論に、全国の地方自治体が注目しているのかも知れません。

⑥「沈む日本を愛せますか」 内田 樹/著 ロッキング・オン

3.11 直前の1年半に3度も首相が変わる中での対談。瑞々しい感性と批評眼で世界を捉える学者・武道家の内田樹氏が、高橋源一郎氏と語ります。対談テーマの一つ「世界に一番近い人とは」で内田氏が「宮崎駿監督が日本の子供のためにしか映画を作らないとっていて」と述べるくだりでは、日本国の島国性、外交言語力の弱さを認識しつつも、未来に繋がる思考を展開させようとする気迫を感じます。

⑦「うたばうたゆん 奄美 島唄への旅」 浜田 康作/写真 毎日新聞社

独特の歌唱法で知られる奄美の島唄をぜひ、鮮やかな写真の数々と共にお聴き頂けらと思います。島はシマ=集落を意味するので、島唄=集落ごとに異なる唄です。同じ曲名でも、すぐお隣の集落と唄い方が異なるのは珍しくありません。NHKBS「新日本風土記」のテーマ曲でお馴染みの唄者、朝崎郁恵さんのCD付きです。

⑧『奄美 生命の鼓動 海底のミステリーサークル』

大方 洋二/写真 講談社

初めて知った時から変わらず、このミステリーサークルを見る度にドキドキします。たった10cmほどの雄フグが4～5日もかけて雌フグのための産卵床をたった1匹で見事に作り上げます。なんと産卵の時は必ず雄が雌の を噛みます。2014年に新種としてアマミホシソラフグと名付けられました。美しいカラー写真でいっぱいのお勧めの本です。

⑨『宇宙を回す天使、月を飛び回る怪人-世界があこがれた空の地図』

エドワード・フルック＝ヒッチング/著 関谷 冬華/訳

日経ナショナルジオグラフィック社

宝石箱をひっくり返したような満天の星空を最近見ました。この本は、古代の満天の星空の絵から最先端の技術で見える星空までを紹介しています。人々が、国も文化も問わず夜空を見上げていた事がわかります。「無から万物が生まれる」中国の宇宙観も、カラー木版画写真でみることができます。タイトルが面白いですね。

⑩『世界を変えた100のスピーチ 上』コリン・ソルター/著

大間知 友子/訳 原書房

高校時代、哲学が好きでした。でも現代の哲学を知るためにはそれ以前の全てを知らないとは結局理解できないという思いがあり読むのを諦めました。そして約35年経った今、「知れば知るほど知らざるを知る」を痛感する毎日です。本書のトッスバッターは「私は何も知らないということを知っている」と言ったソクラテス。正に、この姿勢こそが凡ゆる未知の事象に向かう態度であるべきではと、コロナ禍の現在に改めて感じています。日本人はただ一人、昭和天皇「人間宣言(神格の放棄、1946年)」が収録されています。